

リンダ リンダ リンダ

2005(平成17)年8月12日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督＝山下敦弘／出演＝ペ・ドゥナ／前田亜季／香椎由宇／関根史織／三村恭代／湯川潮音／山崎優子／甲本雅裕／松山ケンイチ／小林且弥／三浦誠己／リリィ／藤井かほり（ビターズ・エンド配給／2005年日本映画／114分）

……高校生活最後の花の学園祭。そこで今どきの女子高生が熱唱するのは、1980年代のロックバンド、ブルーハーツの『リンダリンダ』。練習は3日間だけ。ボーカルはにわか仕立ての韓国からの留学生。それは一体なぜ……？しかし、こんなはちゃめちゃん状況下でも、それをやりとげていくのが若さと青春の女子高生パワー！『スウィングガールズ』（04年）とは一味違う、等身大の「4人組」に拍手！もっとも「ソンちゃん」の女子高生姿には少し無理が……？

この映画への関心は……？

この映画のキャッチコピーは、「女子高生がブルーハーツ」と「ボーカルは韓国からの留学生!？」。そして、この留学生は『TUBE（チューブ）』（03年）のペ・ドゥナだし、女の子バンドの1人である恵は『ローレライ』（05年）への登場一発で覚えた特徴ある顔立ちの香椎由宇。高校生らしい夏の制服とミニスカートがまぶしい4人組の写真は、あの『スウィングガールズ』（04年）と同じように魅力的！そこで、ぜひこれは観に行かなければ……？

ブルーハーツと『リンダリンダ』

ブルーハーツが結成されたのは1985年、『リンダリンダ』でメジャーデビューしたのは1987年とのこと。そして、1995年に解散したこのブルーハーツは、メンバーの入れ替わりこそあれ、日本のロックバンドに大きな影響をおよぼしたとの

こと。しかし、音楽好きだが56歳の私は、このブルーハーツを知らない人間の1人。宣伝チラシの中にある「一足お先にご覧頂いた方々の声」には、「映画はよかった 96%」「リンダリンダという曲を知っている 100%」「ブルーハーツを知っている 97%」という円グラフが紹介されているが、これはあまりにも片寄りすぎた調査結果で、誇大宣伝では……？ ここまでブルーハーツと『リンダリンダ』を前面に押し出してしまうと、ブルーハーツの「シンパ同窓会」みたいになってしまい、これを知らない人たちや、私みたいに純粋に4人組女の子バンドに関心をもつ人たちの足を遠ざけるのでは……？

第1の前提——花の学園祭

高校生活最後の学園祭ともなれば、それぞれに大きな思い出があるはず。もっとも、私の高校3年生の時代は、大学の受験勉強オンリーの冬の時代。しかし、「とある地方都市にある芝崎高校」は全体的に取り柄のない高校だが、唯一の目玉は学生数の多さにあぐらをかいたような派手な文化祭、ひいらぎ祭とのこと。それもちょっと悲しい気がするが、まずはそれが前提の第1。

第2の前提——5人が割れた！

このひいらぎ祭のロックフェスティバルでオリジナル曲を披露することになっていたのが、響子（前田亜季、ドラム）、恵（香椎由宇、キーボード）、望（関根史織、ベース）と萌（湯川潮音、ギター）そして凜子（三村恭代、ボーカル）の5人組女子高生バンド。

ところが、ライブの3日前になって、ギターの萌がバスケの練習中、指を骨折。これが引き金となって、気の短い恵と凜子がケンカし、ぶち切れた凜子は「やめた」と宣言したため、バンドは空中分解。さて残った響子、恵、望の3人はどうするの……？ これがこの映画の前提の第2。

高校生でもやっぱり女は複雑で難しい……？

女のケンカは陰湿で後をひくもの、と昔から相場が決まっている……？ 萌の指の骨折は不注意といえば不注意だが仕方ないもの。そして萌はさかんにそれを

謝っているし、メンバーたちもそれは認めている。なのに、なぜ恵と凜子がケンカ……？

さらに、ウジウジと迷った末、やっと参加すると決めた恵、響子、望の3人がボーカル探しをしているところに通りかかった凜子に、声をかけたところ、凜子は「やってもいいよ」と返事。これで万事解決かと思ったら、続いて凜子がブルーハーツのコピーをやることについて、「やって、意味あんのかなあ」と言ったため、恵は「もともと意味なんかないヨ！」と大反発……。これで、女の子同士の対決は決定的に……。高校生でもやっぱり、女は複雑で難しい……？

誤解から進む話はよくある話……？

しかし、この場での恵と凜子とのケンカはその後の新たな展開を生むことに。すなわち、恵は教室から出てきた韓国からの留学生ソン（ペ・ドゥナ）の姿を見て、とっさに大声で「ねえ、ソンさんボーカルやらない？」と声をかけたのだ。するとソンは、何を言われているのかよくわからないまま、「ハイ、いいですよ」と返事。ここに、新たな4人組ロックバンドが誕生し、その後の展開はすべてこのちょっとした誤解から始まることに……。

こんな風に、ちょっとした誤解からその後の大展開が始まるのはよくある話。現在、連日報道されている衆議院議員総選挙の立候補者をめぐる自民党内の争いも、8月8日の参議院本会議における郵政民営化法案の否決をめぐる、ちょっとした（大いなる？）誤解から生まれた大展開……？

もう1つの興味は4人組それぞれの恋愛模様

高校3年生＝花の17歳ともなれば、あちこちで恋の花が咲くのは当然。「女3人集まればかしましい」のは当然だが、大阪のオバちゃん3人の話題は、未だにヨン様か……？ それに対して、女子高生4人の話題は……？ もっともこの分野でも、日本人の3人はお行儀がいい(?)のに対し、韓国人のソンちゃんは直接的で、他人の恋愛模様に露骨に興味を……？ 山下敦弘監督は1976年生まれで28歳だが、女子高生の心理のひだを实によく心得ているようで、映画の中で展開される、響子、恵、ソンの3人それぞれの恋愛模様は面白い……。

まずしっかり者(?)の恵は、その面においても進んでいるようで、元カレの前園トモキ(三浦誠己)はミュージシャン。次に今ドキの高校生らしくない、ウブで美しい純愛ドラマを展開するのが、響子と大江一也(小林且弥)の2人。そして何ともトンチンカンで先行きが怪しいのは、ソンちゃんを好きになった2年生の槇原裕作(松山ケンイチ)。言葉の壁を懸命に乗り越えようとし、怪しげなハングルを操る裕作は立派なものだが、その恋の成前はまずムリか……? 映画の中にはなぜか望の彼氏が登場しないけれども、こんなかわいい女の子を男が放っておくはずがない……。

ソンちゃんの熱演に拍手。しかし……?

この映画が成立したのは、たどたどしい日本語の韓国人留学生ソンちゃんがポータルをやるという面白さと、4人組を中心とした女子高生たちの生態(?)の面白さ……! たしかにさまざまな場面でくり広げられるそれらのセリフと演技は面白く、この映画を立派な青春映画に仕上げさせるポイントとなっている。

その中でもひととき目立つのはペ・ドゥナ演じるソンちゃん、韓国人俳優はみんな生まれながらにしてコメディを演ずる能力があるのかと思ってしまうほど、ボケ役(?)を自然にうまくこなしている。しかし考えてみれば、彼女は韓国国内で既に多数の映画に主演し、数々の賞を受賞している1979年生まれのパレタン(?)女優なのだから、演技がしっかりしていて当然……。『TUBE(チューブ)』で観たイメージとは全く違う、こんな青春映画でも、このソンちゃんの役割を、山下敦弘監督が感心するほどうまくこなすのだから、やはり、韓国の女優は基礎がしっかりできているということだろう……。もっともまことに失礼ながら、前田亜季、香椎由宇、関根史織の3人が1985年、1987年生まれだから、ミニスカートの女子高生役がピッタリなのに対し、26歳のソンちゃんの子高生姿にはやはりちょっと無理が……?

大切にしたい若者のエネルギー!

『スウィングガールズ』はジャズ演奏だから17名という大所帯だったが、この女子高生4人組バンドと同じように、男子高校生の4人組バンドを主人公に起用

した映画が『ビートキッズ』（05年）だった。

私は音楽映画大好き人間だから、知らない音楽であっても、その映画で観て体験すればそれだけですぐに楽しむことができる性分。『スウィングガールズ』で流れる曲はスタンダードな曲ばかりだから、多分多くの日本人が知っているものだろうが、『ビートキッズ』に登場した曲も、この『リンダ リンダ リンダ』に登場するブルーハーツの『リンダリンダ』をはじめとするいくつかの曲も、私ははじめて聴くものばかり。しかしそれでも、高校生が一生懸命にその歌を練習して本番で一発オーケーとなる姿は美しいもので感動的だし、その音楽を聴いていけば自然に楽しくなり、弾けてくるもの。私だってそれぐらいの若さはまだ十分もっているつもり……。

また、「教育論」から言っても、たとえ勉強なんか全然できなくても1つの楽器にうちこみ、バンド仲間との連帯感を養う作業は、社会人として生きていくうえで十分役立つ学習のはず。『ビートキッズ』やこの『リンダ リンダ リンダ』で見せてくれる若者たちの弾けるエネルギーを私たち大人は大いに大切にしたいものだ。

2005(平成17)年 8月13日記

ミニコラム

ロックもいいけど勉強も……

ビートルズの初来日は1966年。以降、日本はGS全盛時代を迎えた。しかし根強く残っているのが、ロック=不良という偏見……？ 青春時代をギターやロックに明け暮れるのもいいが、その成功がいつまで続くかわからないの

がこの業界の厳しさ。楽器やボーカルの技とともに勉学にも励み、頭の方の訓練もおこななければ、将来ヤバイぞ！

2005(平成17)年10月18日記

山東省旅行記その2——孔子廟と岱廟

・一山一川一聖人

今回の山東クルーズで耳に残った言葉の1つがこれで、泰山・黄河・孔子を指すもの。山東省はこの3つが自慢というわけだ。もう1つ面白い言葉は、「万里の長城に登らなければ一人前の男になれない。黄河を見ていなければ落ち着かない。泰山の山頂までに至らなければ英雄ではない」というもので、これは山東省を超え中国全体のスケールでの自慢話……？

・曲阜と孔子様

山東省で最も有名なまちは曲阜かもしれない。春秋・戦国時代のBC551年に孔子が生まれた曲阜のまちは現在人口55万人だが、そのうち約10万人が孔姓を名乗っている。曲阜で必ず観光客が訪れるのは、孔子廟・孔子府・孔子林の三孔。私が孔子林で今回出会ったのは、孔子のお墓の側で絵を描いている18歳の若者。この孔祥涛こそ、孔子75代目の子孫なのだ。曲阜名物の孔府料理の豪華さや孔子の学者・思想家・教育者としての偉大さとあわせて、孔子一族の氏族繁栄（生殖）能力のたくましさにビックリ！

・岱廟は？

聖山と崇められる泰山への登山は岱廟への参拝から始まる。この岱廟は始

皇帝が奉禪の儀を行った後に増築を重ねられ、南北の中軸線上には宋代に完成されたという数々の立派な建物が並んでいる。その中心は天貺殿で、北京故宮の太和殿、孔廟の大成殿と並ぶ中国三大宮殿建築の1つだ。

・坂和皇帝の誕生か？

そんな聖なる岱廟において、坂和弁護士は今回奉禪の儀の真実事を……？まずは黄色い衣装を着て、赤い冠をかぶり、玉座(?)に座った雄姿をご覧あれ! 「馬子にも衣装」とはよく言ったもので、微笑んで(にやけて?)いるのは少しだけだが、冠の両横に見える白髪と相まって、その貫祿は十分。まず私が10円で「皇帝の座」を買った後は、仲間のツアー客も次々と……。実は皇后(?)と並んだ写真もあるのだが、それはここではヒ・ミ・ツ……？

2005(平成17)年10月29日記

